

1. 解答例

条件を表す接続助詞「と」は文末にモダリティ制約があり、問題文の「～てください」のような相手への指示や依頼のほか、例1のように話者の意志などを表す文には用いることができない。

例1. 困ったことがあると、友達に相談しよう。

このような文には例2のようにモダリティ制約のない接続助詞「たら」の使用が適切である。

例2. 困ったことがあったら、いつでも私に連絡してください。

条件を表す接続助詞「と」にモダリティ制約があるのは、基本的に「と」は、例3のように前件の成立に伴い、常に後件が起こるといった事象を表すのが典型的な使用であるためである。

例3. 春になると、桜が咲く。

そのため、接続助詞「と」は道順の説明（例4）や、機械操作（例5）の説明などによく用いられる。

例4. 100メートルぐらいこの道をまっすぐ行くと、交番は左にあります。

例5. このボタンを押すと、お湯が出ます。

また、前件の成立が後件の事態を招くということで、接続助詞「と」は、例6のように、警告や注意を促す文にも用いられる。

例6. 急がないと、バスに間に合いませんよ。

2. 解答例

比喩とは、ある対象（被喩体）を別の対象（喩体）との関係に基づいて理解・表現する修辭的技法である。伝統的修辭学では意味の転移とされるが、現代認知言語学では、異なる概念領域間の体系的対応（mapping）によって、ある領域を別の領域を通して理解する認知的操作とされる。また語用論的には、聞き手が文脈や共有知識に基づき、字義を超えた意図的意味を解釈する点に特徴がある。比喩は、類似に基づくもの（直喩・隠喩）と、隣接・包含関係に基づくもの（換喩・提喩）に分類される。

①直喩（明喩）は、「ようだ」「みたいだ」などの標識によって類似関係を明示する比喩である。例「彼の声は鐘のように響く」では、声と鐘の「遠くまで澄んで届く」という属性が対応付けられている。また「彼女の笑顔は太陽のようだ」では、笑顔と太陽の「明るく周囲を照らす」という性質が対応し、心理的印象が具体化される。

②隠喩（暗喩）は、類似標識を用いず、被喩体を喩体として直接表現する比喩である。例「彼は氷だ」では、人を氷として再カテゴリー化することで、「冷たさ」「無感情性」という属性が人の性格理解に用いられる。また「時間は川である」では、時間を川として捉え、「不可逆的に流れる」という構造的対応によって抽象概念が具体化される。

③換喩は、対象間の隣接関係（場所と組織、作者と作品など）に基づく指示の転用である。例「ホワイトハウスが声明を出した」では、建物（場所）がそこに属する政府（組織）を指す。また「モーツァルトを聴く」では、作者名が作品を指し、隣接関係に基づく理解が成立する。

④提喩は、部分と全体、種と類などの包含関係に基づく換喩の一種である。例「新しい顔が入った」では、部分（顔）が全体（人）を指す。また「パンを得るために働く」では、特定の食物（パン）が生活の糧全体を指し、上位概念が下位概念によって表現される。

このように比喩は、概念間の類似・隣接・包含関係に基づく対応付けによって、抽象的・複雑な対象を具体的かつ理解しやすく表現する言語の基本的機構である。

3. 解答例

第一言語では、親や周囲の年長者が乳幼児に語りかける Child-Directed Speech(CDS)の役割が重要である。大人は無意識に乳幼児に合ったレベルの言語で語りかけ、それがインプットとなって習得を促進する。そこで重要なのは親と子がいて、興味の対象である物や事象との三項関係を築く共同注意という行為である。親と子がコンテクストを共有し、興味の対象に注意を向けてインターアクションをすることが習得には重要である。また、第一言語では親は子供の文法の誤りを訂正しないという定説があったが、近年では明確に文法の誤りを訂正することはないが、暗示的な形でのフィードバックはしていることが明らかになっている。

第二言語でも CDS と同様の役割を果たすのがティーチャートークやフォリナートークである。それは大人同士の会話より簡略化された言語であるという点で、CDS との共通点がある。しかし、第二言語の場合は、学習者も能動的にインターアクションに関わり、お互いの意思疎通ができるまで意味交渉を繰り返すプロセスが習得を促進するとされている。また、そこで教師や母語話者から否定フィードバックを受けることも重要である。第一言語習得の影響で、第二言語習得でもリキャストのような暗示的フィードバックの重要性が関心を集めているが、実際の教室では、誤りを明確に指摘されたり文法説明を受けたりするような明示的なフィードバックも受けている。

したがって、第一言語でも第二言語でも、一方的に簡略化したインプットを受けるだけでなく、第一言語の乳幼児、または第二言語の学習者も能動的にインターアクションに従事する必要があることは共通点である。しかし、第一言語習得では大人が乳幼児に言語レベルを合わせようとするのに対し、第二言語習得においては、教室以外の場所ではレベルの未調整の言語を受けてインターアクションしなくてはならない場面も多い。また、乳幼児は周囲の大人や年長者とのインターアクションが、ほぼ全ての習得の機会であるが、第二言語の学習者は教室内外のインターアクションの他に、教室で文法学習をするなどの学習の場があり、それをインターアクションに活かそうとすることは、乳幼児との大きな違いである。

解答例：

第二言語習得における年齢の影響は長年議論されており、一般には子どもの方が有利と考えられている。研究によれば、学習開始年齢が低いほど発音は母語話者に近づきやすく、成人は初期の習得速度では優れることがあるものの、長期的には早期開始者の方がより成功するが多い。

しかし、早期学習の利点は必ずしも長期的に維持されるとは限らず、音韻では若年者が優れる一方、形態論では成人が優れるという結果もある。また、成人でも母語話者に近い発音を習得できる可能性が示されており、実際に21歳でアラビア語を学び始めたJulieは、没入環境で語彙や構造を記録しながら学習し、6か月で円滑な意思疎通が可能となり、2年半後には母語話者と区別がつかない水準に達した。一方で、動機があっても目標言語話者との接触が限られた学習者は習得が遅れる例も報告されている。

年齢差の説明として臨界期仮説が提案されており、これは言語習得が容易な生物学的期間の存在を想定するものである。また、脳の髄鞘化によって学習経路は固定されるが柔軟性が低下するという説明もある。しかし、これらの生物学的説明には議論があり、絶対的な限界ではなく、到達可能な習得水準が変動する「敏感期」とする見方も示されている。実際、成人でも母語話者に近い能力を達成した例が報告されており、年齢と習得能力の関連を緩やかに捉える必要があると指摘されている。

さらに、社会的距離などの社会情動要因は習得の困難さに影響し、子どもは成人より文化的制約を受けにくいとされる。一方、成人は知識や経験、規則を意識的に分析する能力により理解可能な入力を得やすく、学習を計画・監視・評価する能力にも優れているとされる。

(706字)

問1.【解答例】

介護福祉士国家試験の専門用語も、介護現場で使われている特殊な言葉も難解であるなかで、日本語を母語とせず漢字の知識も少ない介護福祉士候補者に、それらの日本語をどのように指導し、試験に合格させるか、という難しい問題。

問2.【解答例】

この場合の「さえ」は、〈極端〉なものごとを取り立てて、それと同類のものごとを言外に〈類推〉させる機能をもつ、とりたて助詞である。介護福祉士候補者を支援しつつも、逆に過度な負担を強いていることを申し訳なく思う複雑な心情のなかで、「虐待ではないか」という極限的な思いにまで至った筆者の気持ちが表れている。「さえ」を用いない②の文は、単に「虐待ではないかと思った」という事実を述べるのに対し、「さえ」を添加した①の文は、「虐待ではないか」という自身の心情を、入り混じる数々の思いの中で最も極限的な心情と捉えて提示している。

問3.【解答】

2 介護

問4.【解答例】

昭和初期に、国語改革運動が起こり、日本医学会の医師たちが奮闘して「呑酸嘈囉」を「むなやけ」とするなど、難解でわかりにくい医学用語を整理統一して改訂する動きがあったこと。

問5.【解答例】

筆者は、現在の介護現場や介護福祉士国家試験で用いられている用語が過度に難解であると指摘する。中でも漢語の専門用語は非漢字圏出身の介護福祉士候補者に大きな負担を強いていることを強調している。そして、かつては医学分野でも難解語を整理統一し、改訂した歴史があることをふまえ、今後、介護とそれに関連する医学や看護の用語を見直し、誰にでもわかりやすい「やさしいことば」に変えていくべきだと主張している。筆者が述べるように、候補者は難解な用語に苦心する必要がなければ、コミュニケーションに重点をおいた日本語学習に注力できる。介護福祉士の現場で第一に大切なのは、利用者やその家族に温かい言葉をかけ、同僚と信頼を築く、心の通じた言葉の交わし合いができることではないか。私はそのような観点での日本語教育を追究したい。一方で、介護の専門性を担保するには専門用語も欠かせない。必要な知識を学んだり、体調を適切に伝達したりするための、学びやすく使いやすい日本語表現についての検討が重要だと考える。（437文字）